

# 戦後の三里塚牧場の開拓と沖縄・久米島

神田文人・高澤美子

この論文は、戦後千葉県各地で入植・開拓が行われ開拓農業協同組合が全県下で113ヶ所も組織されたが、それらを総体として取り上げるのではない。三里塚の御料牧場に入植した沖縄県出身者の入植時の非常なる苦労やその組合の推移を辿り、かつその中心となった久米島出身者との関係を追跡したものである。

沖縄県人は伝統的に海外や日本本土への移民が多かったが、久米島もその例外ではなかった。その一人に与世盛智郎のようにハワイで薬剤師として活躍していた人材も存在した。その与世盛が戦争最末期以後、日本本土に在住していたので、郷里に帰れなくなった県人とくに久米島出身者を集めて御料牧場の開放に着手し、開放に成功した。与世盛が組合を去った後、組合の経営は娘婿の上江洲智泰ら同じ久米島出身者に委ねられ、ようやく生活の安定が得られたとき、全く突如として成田空港問題が発生し、立ち退きを余儀なくされたのである。

この論文は全体の構成を打ち合わせた上で主として神田がまとめたが、その際、数回の聞き取り調査については高澤の協力を得た。とくに沖縄本島での石川友紀・上江洲智泰氏との、久米島での喜久永正・上江洲智隆氏との面談については細部にわたる点検を経て作成されたものである。

## I 戦後の千葉県と入植・開墾

第2次大戦後、食料増産のため各都道府県で入植、開墾が始まったが、千葉県はその枢要な地位を占めた。その理由は首都東京に近接していることと、旧陸軍の施設・演習場が広大な面積を占めていたからである。

旧陸軍の施設・演習場が多かった理由は、本誌前号に簡単に述べたように江戸時代の下総地域に小金、佐倉の牧があり、そこで馬の飼育が行われていた。その地域が明治維新後には政府の管轄地に編入され、結局は陸軍の所管となり、習志野の演習場や諸施設、下志津原の射撃場、飛行場など

になったからである。その面積は約6,507ha、この他に他県と違う「国有地即ち三里塚御料牧場、利根川遊水地、鬼泪山老川等の国有林野であってその面積は約1,502haである」という<sup>1)</sup>合わせて8,000ha（約8,000町歩）以上の土地があるというのは大変注目される条件であった。

三里塚という地名を『地名辞典』で見ると、江戸時代の佐倉牧のなかの取香牧の字名で、近世は駒井野村と称した。1889年の町村制施行で取香村、十余三村等13か村と合併して遠山村となり、1954年、成田町を中心とした成田市に合併された。地名の由来としては「香取郡多古町の日蓮宗中村檀林を起点に、江戸まで1里ごとに法華塚を建て、

その三番目の場所といわれ、また、一説には佐倉城から3里ともいう<sup>2)</sup>とある。

ところで日本は敗戦の結果陸海軍は解体された。そこで旧陸海軍の管轄地を平和的に利用して、海外からの引揚げ者や戦災被害者を迎えて食料生産のために農場にすることが欠かせない課題となった。政府は敗戦直後の1945年11月9日の「緊急事業実施要領」を閣議決定した。その目的は「終戦後の食糧事情及復員に伴う新農村建設の要請に即応し、大規模なる開墾、干拓及土地改良事業を実施し以て食料の自給化を図ると共に離職せる工具、軍人其他の者の帰農を促進せんとする」ことであった。そのために国は実施要項を作成し、「5年間に内地85万町歩、北海道70万町歩、計155万町歩の開拓と、概ね6年間に湖面干拓7万5千町歩、海面干拓2万5千町歩、計10万町歩の干拓を実施し、概ね5年間に内地80万戸、北海道20万戸の干拓を実施し、概ね5年間に内地80万戸、北海道20万戸、計100万戸の入植を行う」という構想<sup>3)</sup>であった。全国85万町歩の中には富士山麓や浅間山麓等の国有地をも含んでいたのであろうから、東京に近く、かつ平坦な千葉県の約8,000町歩というのは面積の全国比では1/100未満ではあるが、大いに注目されたと思われる。県下の軍用地や三里塚の御料牧場のような国有地が戦後開拓の候補地になったのである。

ところがこれらの土地の中には戦争中の急速な軍備拡張のために強制買収をした土地もあった。たとえば君津郡八重原村（君津市）では1943年に海軍工廠建設のために土地買収が行われた。それらの土地は戦後、元の所有者が返還を求めるなど、すぐに開墾するというようにはいかなかった。幾多の問題が噴出し、単純には開墾事業は進まな

かった<sup>4)</sup>。その結果、農地改革のために適地として開拓されたのは約4,496ha（約4,500町歩）であったという<sup>5)</sup>。こうして開墾された農地は県下全部で113カ所の開拓農業協同組合が組織された。その規模は1955年段階で、小は3、4戸から大は252戸（四街道市の大日）に及ぶ大規模の農協もあった。その分布は第一図のようである<sup>6)</sup>。これで見ると圧倒的に昔の下総国が多い。その理由はこの地域に軍の施設や演習場などが広がっていたからである。それらの地域への入植は大変困難であった。その状況は次のように記されている。

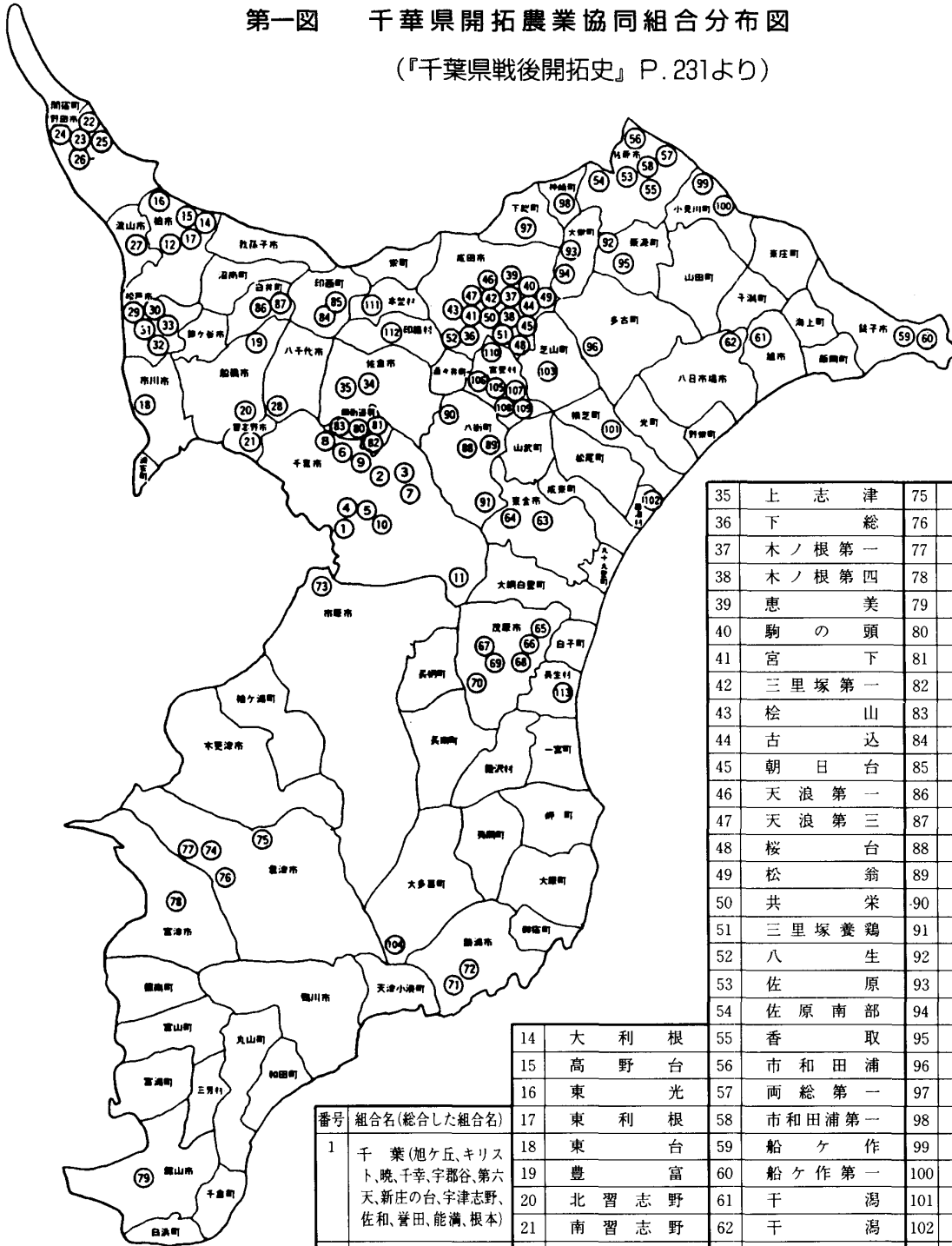
本県の開拓者は、その大部分が緊急開拓事業に基づいて入植した、復員軍人、戦災者、海外引揚げ者等であったため、農業の経験を有する者は極めて少数で大、小麦の区別は勿論、甘藷の植方すら知らないのが、入植当初の姿であった。更に加えて、入植地が旧陸海軍の演習場、飛行場等の跡地であったため、それ等の土地は、概ね表土を攪乱して心土を露出した、低生産性土壌であって、種苗の入手は困難、化学肥料の配給はなしいわんや堆肥の準備はなく当初は深刻な食料難の打破に終始する営農が、各種建設工事の中に続けられたので開拓者の生活は、極端に耐乏を余儀なくされた<sup>7)</sup>。

それらの開拓地はごく大まかに見ても千葉市、柏市、市川市、習志野市、松戸市、佐倉市、銚子市、茂原市、四街道市などの開墾地は圧倒的に軍用地が多かった。これにたいして成田市の場合は全部国有地の御料牧場であった。いうまでもなく三里塚の御料牧場で、そこに17カ所の入植開墾が行われた。地図上の番号と農協名を照合するために開墾地を列記すると以下のようなになる。ただしこれは1974年段階のものである<sup>8)</sup>。

戦後の三里塚牧場の開拓と沖縄・久米島

第一図 千葉県開拓農業協同組合分布図

(『千葉県戦後開拓史』P. 231より)



35	上志津	75	高野
36	下総	76	長石
37	木ノ根第一	77	新興
38	木ノ根第四	78	鬼沼山
39	恵美	79	神戸
40	駒の頭	80	大日(青葉)
41	宮下	81	四街道
42	三里塚第一	82	畦田
43	桧山	83	鹿放ヶ丘農苑
44	古込	84	船穂
45	朝日台	85	草深
46	天浪第一	86	護謨従業員
47	天浪第三	87	白井
48	桜台	88	八街
49	松翁	89	八街中央
50	共栄	90	八街夕日ヶ丘
51	三里塚養鶏	91	板橋
52	八生	92	大須賀村
53	佐原	93	昭栄
54	佐原南部	94	昭栄第一
55	香取	95	栗源
56	市和田浦	96	中村
57	両総第一	97	小御門
58	市和田浦第一	98	米沢
59	船ヶ作	99	阿玉川八丁目
60	船ヶ作第一	100	小見川八丁目
61	千潟	101	横芝町
62	千潟	102	蓮沼
63	士農田	103	二川
64	丘山	104	老川
65	富士見(東郷、御用地)	105	富里村(十倉、双葉、葉山、獅子穴、球陽、平和の一部、両国、末広)
66	〃(茂原)		
67	〃(高師)		
68	互助会	106	東
69	早野	107	総栄
70	豊岡	108	平和
71	白井久保	109	富里二区
72	鬼石	110	吉川
73	川岸	111	本埜村埜原
74	君津(伊豆島、松丘、久留里、八万台)	112	六合萩原
		113	城之内

14	大利根
15	高野台
16	東光
17	東利根
18	東台
19	豊富
20	北習志野
21	南習志野
22	七福農場
23	光岡台
24	阿部沼
25	木野崎
26	梅郷
27	新川
28	高津新田
29	松戸
30	松戸ゴルフ
31	鵬原
32	稔右
33	岩瀬第二
34	佐倉

番号	組合名(総合した組合名)
1	千葉(旭ヶ丘、キリスト、晩、千幸、宇郡谷、第六天、新庄の台、宇津志野、佐和、菅田、能満、根本)
2	三愛
3	若松
4	天台
5	天台新生
6	長沼
7	花島
8	千種
9	山王
10	平川
11	土気
12	柏地区(利根、筑波、十余二、旭、梅林)
13	鴻ノ巣

環境情報研究 第 8 号

番号	開拓農協名	戸数		設立年月日	国有地等	田畑	現況
		1955	1961				
36	下 総	44	35	1948.10.21	国 (御料牧場)	畑	成田空港
37	木ノ根第一	24	25	1948.11.27	国 (御料牧場)	畑	成田空港
38	木ノ根第四	12	12	1948.7.17	国 (御料牧場)	畑	成田空港
39	恵 美	6	7	1948.12.3	国 (御料牧場)	畑	成田空港
40	駒 ノ 頭	30	26	1949.3.25	国 (御料牧場)	畑	成田空港
41	宮 下	90	62	1948.4.5	国 (御料牧場)	畑	成田空港
42	三里塚第一	35	35	1948.7.16	国 (御料牧場)	畑	農地
43	桧 山	7	7	1949.3.26	国 (御料牧場)	畑	成田空港
44	古 込	11	11	1948.9.10	国 (御料牧場)	畑	成田空港
45	朝 日 台	16	15	1949.9.1	国 (御料牧場)	畑	成田空港
46	天浪 第一	10	8	1948.8.11	国 (御料牧場)	畑	成田空港
47	天浪 第二	19	21	1949.8.22	国 (御料牧場)	畑	成田空港
48	桜 台	22	15	1949.7.9	国 (御料牧場)	畑	成田空港
49	松 翁	6	6	1949.12.9	国 (御料牧場)	畑	成田空港
50	共 栄	2	4		国 (御料牧場)	畑	成田空港
51	三里塚養鶏	4	4		国 (御料牧場)	畑	成田空港
52	八 生	4			国 (御料牧場)	畑	農地

三里塚御料牧場の入植開墾地

この三里塚の御料牧場に、戦後すぐに入植が始まり、1947年12月施行の農協法にもとづいて各地の開拓農組が開拓農業協同組合を設立したのである。

ここで三里塚の御料牧場についての、明治維新後の開墾についてはすでに前号にも述べたところであるが、さらに『下総御料牧場史』『成田市史』等により若干敷衍して述べると次のようである。

1873 (明治6) 年大久保利通の主導で内務省が設置され、大久保が内務卿に就任し、翌年省内に勸業寮が設置され畜産を奨励するようになった。勸業寮は、これより前日していたお雇い外国人、米国カリフォルニアの牧羊家 D. W. アップジョーンズの建言を入れて牧羊場を設けることにした。1873~75年にかけて牧羊場開設の調査を行い、その候補地として取香牧があげられ、75年11月下総

牧羊場、取香種畜場が開設された。下総牧羊場の初代場長に内務省勸業権助岩山敬義が任命され同時に取香種畜場長を兼任、アップジョーンズが雇用され、さらに8月には米国人 H. レーサムが助手に採用された。その後岩山らの尽力で綿羊や牛、馬を飼育し、米国やオーストラリア等からも輸入して品種の改良等に勤めた。その後1880年、牧羊場と種畜場が合併して下総種畜場となり、翌年農商務省が設置されるやその管轄下に入ったが、85年農商務省から宮内省に移管され、その後御料牧場としての役割を果たしてきたのである。<sup>9)</sup>

宮内省に移管された当初は香取、印旛、下植生3郡にまたがり、総面積3,517町歩余であった。地区によって増減があったが、その規模は明治期を通じてほぼ保たれてきた。しかし若干の面積は減少した。それを表示すると以下のようなになる。<sup>10)</sup>

## 戦後の三里塚牧場の開拓と沖縄・久米島

地 区	1885	大正初期
猪ノ頭区 (印旛郡十倉村字猪ノ頭)	592.4町歩	—
両国区 (印旛郡十倉村字両国)	607.1町歩	1,222.00町歩
三里塚区 (下埴生郡駒井野)	1,323.2町歩	1,221.76町歩
駒ノ頭区 (下埴生郡十余三村駒ノ頭及び香取郡吉岡村)	994.9町歩	1,004.00町歩
合 計	3,517.6町歩	3,447.76町歩

その後さらに面積が減少した。その理由は1911年以降、千葉県下の軽便鉄道の用地等に貸し付けられたことが主要な原因であった。さらに大正末期になると大規模な行政整理によって縮小したのだという。『下総御料牧場史』は「大正一一年（一九二二）から翌一二年にわたって大規模な行政整理が行われた。……これによって本場の事業は大幅な整理縮小を余儀なくされることとなった」。1922年11月には「御料牧場官制廃止に伴って名称を宮内省下総牧場」と改めた。<sup>11)</sup>

ところで、敗戦後宮内省の管轄下にあった牧場面積は1,444町歩で、内訳は農耕地707町歩、樹林地437町歩、貸付地29町歩、建物道路等敷地271町歩であった。ところが戦後の食料難に対応するため宮内省はそのうちの牧場用地883町歩を一般に開放することにし、皇室林野局に移管した。それらは一般の入植希望者のほか一部は「宮内省退職者帰農措置要項」により宮内省退職者に割り当てられた。面積の内訳は下記の通りである。<sup>12)</sup>

印旛郡富里村十倉 (富里町)	453町歩
印旛郡遠山村駒井野 (成田市)	429町歩
山武郡千代田村 (佐倉市)	1町歩

この結果牧場の敷地は561町歩に減少した。牧場が宮内省に移管された1885年当時に比べれば1/6以下に減少していた。さらに戦後の農地改革

を決定した「自作農創設特別措置法」は1946年10月21日に公布され、12月29日に施行された。翌47年5月の新憲法施行にともない宮内省は宮内庁に縮減されたが、その宮内庁が48年12月、この措置法にもとづきさらに131町歩を農林省に移管して開放した。その地域は全部印旛郡遠山村内部であった。この結果牧場面積は約430町歩に縮小してそのまま存続し、1966年の新東京国際空港設置の用地に買収されるのを迎え、最終的には栃木県の高根沢に移転するのである。<sup>13)</sup> こうした経緯は御料牧場は発足時に比べると次第に縮小を重ねながら、戦後は食料生産のために牧場を開放していく過程であったことを示している。

## II 三里塚と沖縄県人

さて敗戦を迎えた日本人は全員が食料難にあえていた。とくに敗戦時本土にいた沖縄県人は米軍占領下にあった故郷に帰ることもできず、さりとて身を寄せる手蔓もなかった。そこで適当な入植地を探した。そのとき三里塚入植の先達者となったのが与世盛智郎であった。与世盛について『大岳小学校百周年記念誌』から要約すると、1894年5月久米島具志川村西銘に生れ、1920年東京薬学校を卒業して薬剤師となり、翌年ハワイに渡り、病院の薬局長を務めたが、24年一端帰国し

て京都西本願寺立中央仏教学院に学び、卒業後の27年再びハワイに渡り、ホノルルに慈光園を創設した。42～45年「上海本願寺立中華福寿院主事として中国難民救済に従事、傍ら松井石根大将発願の興亜観音建立のため激戦地を歴訪、敵味方将兵の洗血霊土の収集に当たった。東京大空襲後の敗色濃い戦争末期に本土に戻り、そこで敗戦を迎えた。<sup>14)</sup>

ところが沖縄は米軍に占領されていたため、沖縄出身者は故郷に帰れなくなり、職も食もなくなった。そうした県民の窮状を見るに忍びず、土地を開墾して自活の道を開くために開墾地探しを開始した。ただこの時期の動向は証言者によって内容に違いがある。今それを一定できないのでそのうちの二つについて紹介しておく。

『千葉県戦後開拓史』所収の山里昌英、島寛、上江州智宰、東門口俊英、新城寛政、東門口武八、上江州智昭連名の「下総開拓の歩み」<sup>15)</sup>によれば、彼等は1945年9月19日に瑞穂農場建設委員会を結成して運動を開始し、旧国有地の神奈川県相模原、埼玉県所沢、岩手県小岩井農場、群馬県西軽井沢等を歩いたが、適当な土地を探し得なかった。たまたまその頃東京に「沖縄出身者の福利厚生を援助してする民間団体の沖縄協会」があり「その主事永丘智太郎氏（元雑誌改造編集長）を訪ねて、同氏の協力を得ることが出来た」。彼に「紹介された城間哲雄氏（東京農専助手）は、三里塚御料牧場の事情に詳しく、同地は地味肥沃で、農耕適地であるとの示唆を受けた」。そこで早速現地を訪れて検討した結果適地であることを確認し、開放運動に取り掛かった。

以下年表風に記す。

1945年11月

沖縄協会理事永丘智太郎名で御料地100町歩の開放許可を宮内省に提出

1945年12月20日

瑞穂農園建設世話人責任代表者（伊江朝助、永丘智太郎、与世盛盛春、与世盛智郎ら14名）が再度宮内大臣、千葉県に嘆願書を提出

1946年3月6日

与世盛智郎団長以下、上江洲智泰、儀間真松、上江洲智宰、新城寛政、島寛、上江洲智昭、山里昌英その他総勢20名が現地に乗り込み、開放運動を開始した

一方上江洲智泰(1999年9月死去)『久米島と私』によれば「沖縄協会」ではなく「沖縄人連盟」とあり、それは1945年12月9日に東京で結成された「沖縄出身者相互の連絡と救援をはかり、民主主義による沖縄再建に貢献するために結成された団体」であり、「松本（旧姓真栄田）三益の提唱で比嘉春潮、伊波普猷、比屋根安定、大浜信泉、永丘智太郎が発起人代表。沖縄諸島への救援物資送付斡旋、避難民・海外引揚者帰島斡旋、本土在住者の救済に大きな役割を果たした」という<sup>16)</sup>。代表の一人の永丘は旧姓饒平名智太郎、那覇市出身で元雑誌『改造』の編集長であり、かつ社会運動家としても知られていた。

永丘は与世盛らから沖縄県人の窮状を聞いて東京農業大学で農業を指導していた城間哲夫（哲雄？）を紹介した。城間は戦前学生を連れて三里塚で牛馬の飼育実験をした経験から、三里塚が開拓の適地であると述べた。しかも当時皇室財産にも財産税が課せられるという情報もあった。そこで与世盛らは「今他府県では、沖縄県の間人を受

## 戦後の三里塚牧場の開拓と沖縄・久米島

け入れるだけの余力があろうはずもない。天皇陛下のところなら堂々と言えるから、御料牧場一本に絞ろう」ということになり、御料牧場の開放を目指して運動を開始した。

すでに述べたように、宮内省は牧場を民間に開放することを構想していたのであるから、結果論からすれば、そう困難ではなかったといえるのかも知れない。しかし当事者にはそのことは分からず、まして当時三里塚の開放を巡って各種の団体が競い会っていた。遠山村（成田市）、千代田村（芝山町）、富里村（富里町）の地元住民や戦災者同盟、御料牧場従業員、沖縄出身者等の諸団体であった。これ以後のことについては『千葉県戦後開拓史』と『久米島と私』の記述は一致する。

沖縄出身者は与世盛智郎を中心に先遣隊を組織した。彼の周囲に集まったのは久米島出身者が多かった。与世盛らは1946年3月6日、現地に乗込んで開放運動を開始した。その経緯は次のようであった。<sup>17)</sup>

与世盛智郎氏を団長とし、上江洲智泰氏、儀間真松氏、上江洲智宰氏、新城寛政氏、島寛氏、上江洲智昭氏、山里昌英氏、その他神奈川、埼玉の収容所から入植希望者を募り、総勢20人の1団であった。

これらの内上江洲智泰は久米島出身、後に与世盛の次女と結婚した義息で都城の第23連隊に属し、一時満州のハイラルにいたが、敗戦時は熊谷にいた。上江洲智昭は与世盛の甥、久米島出身で敗戦時は佐世保の海兵団に所属していたが、戦後直ちに復員となり、東京にいる叔父の与世盛を頼って8月29日には上京した。山里も久米島出身で敗戦時東京で小学校教員をしていた。智昭氏は当時八王子に疎開していた叔父の与世盛を訪ねたが、前

に従姉に会って山里の情報を聞き、山里を訪ねた。その時山里は山を借りて開墾をしていたという。さらに与世盛に会い、彼が御料牧場開放の請願運動に着手しようとしているのを聞いて驚き、「天皇陛下の土地を開放できるわけがないじゃないか」と叔父にいったら、叔父は「天皇陛下が土地を持ち続けることができるわけがないじゃないか。いずれ開放される。皆が、何してからじゃ遅いよ。やった後は遅いよ。それがデモクラシーだよ」とたしなめたという。智昭氏にとって「デモクラシー」という言葉も始めて聞いたものだった。<sup>18)</sup>

三里塚に乗り込んだ与世盛ら入植希望者は当初旅館に入ったが、費用面から長期間の開墾作業には耐えられないので千代田の秋元牧場（ドイツ人経営）の馬小屋を借り、土間に藁を敷いて雑魚寝しながら、御料牧場や千葉県庁に御料地開放を訴え続けた。そして、3月16日、千葉県知事より入植許可証を獲得した。<sup>19)</sup>

昭和21年 3月16日

千葉県知事

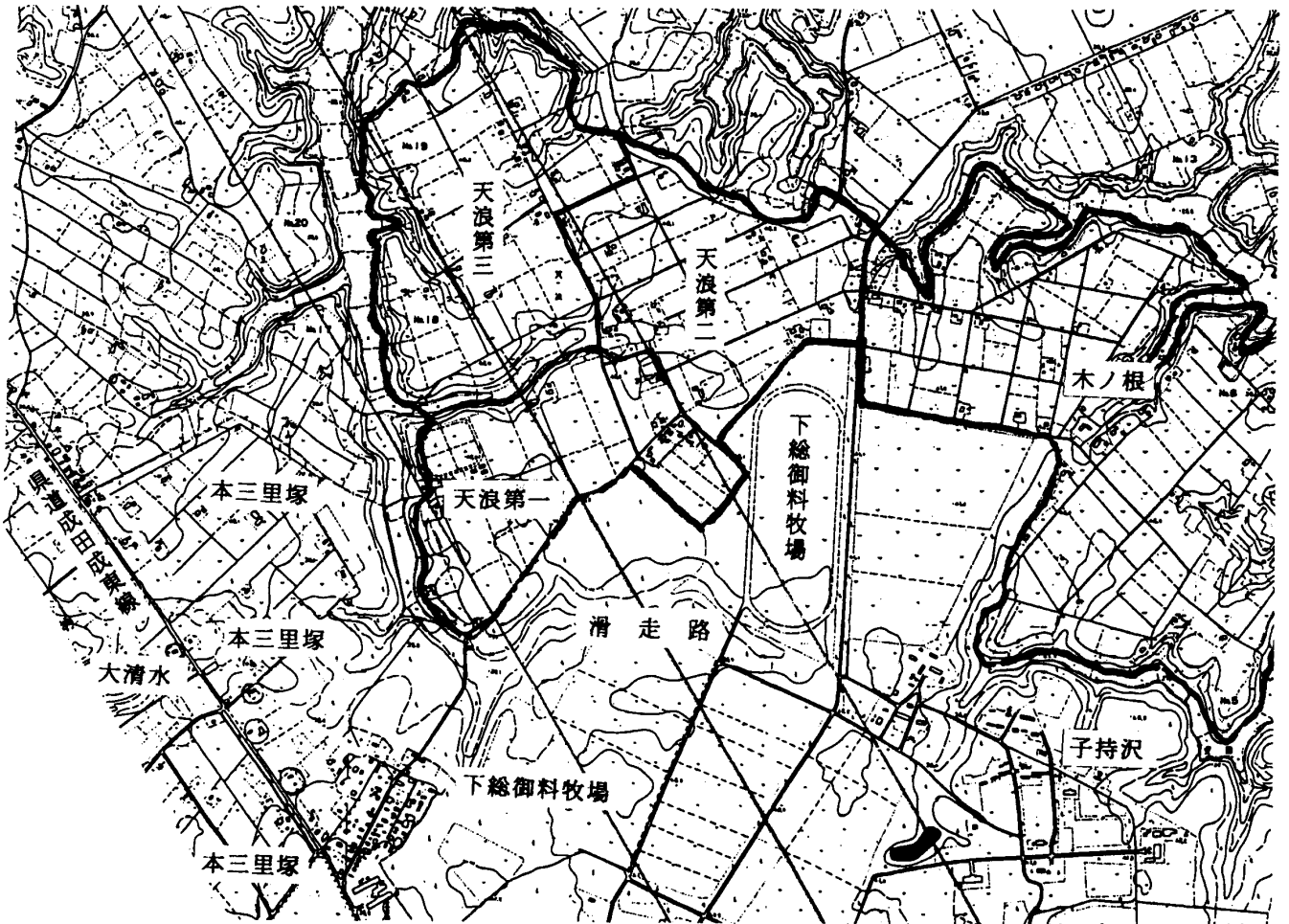
小 野 哲

沖縄県引揚民並ニ復員者

代表 与世盛 智郎 殿

沖縄引揚民入植地ニ関スル件

沖縄協会幹旋ノ沖縄引揚民ノ本県入植ニ関シテ予テ協議中ノ処今般下総御料牧場内天浪第一地区（17町9反）ヲ割り当ツルコトニ決定致シ候条関係方面ト連絡ノ上入植相成度此ノ段及通牒候也



天浪・木ノ根地区と空港滑走路の関係

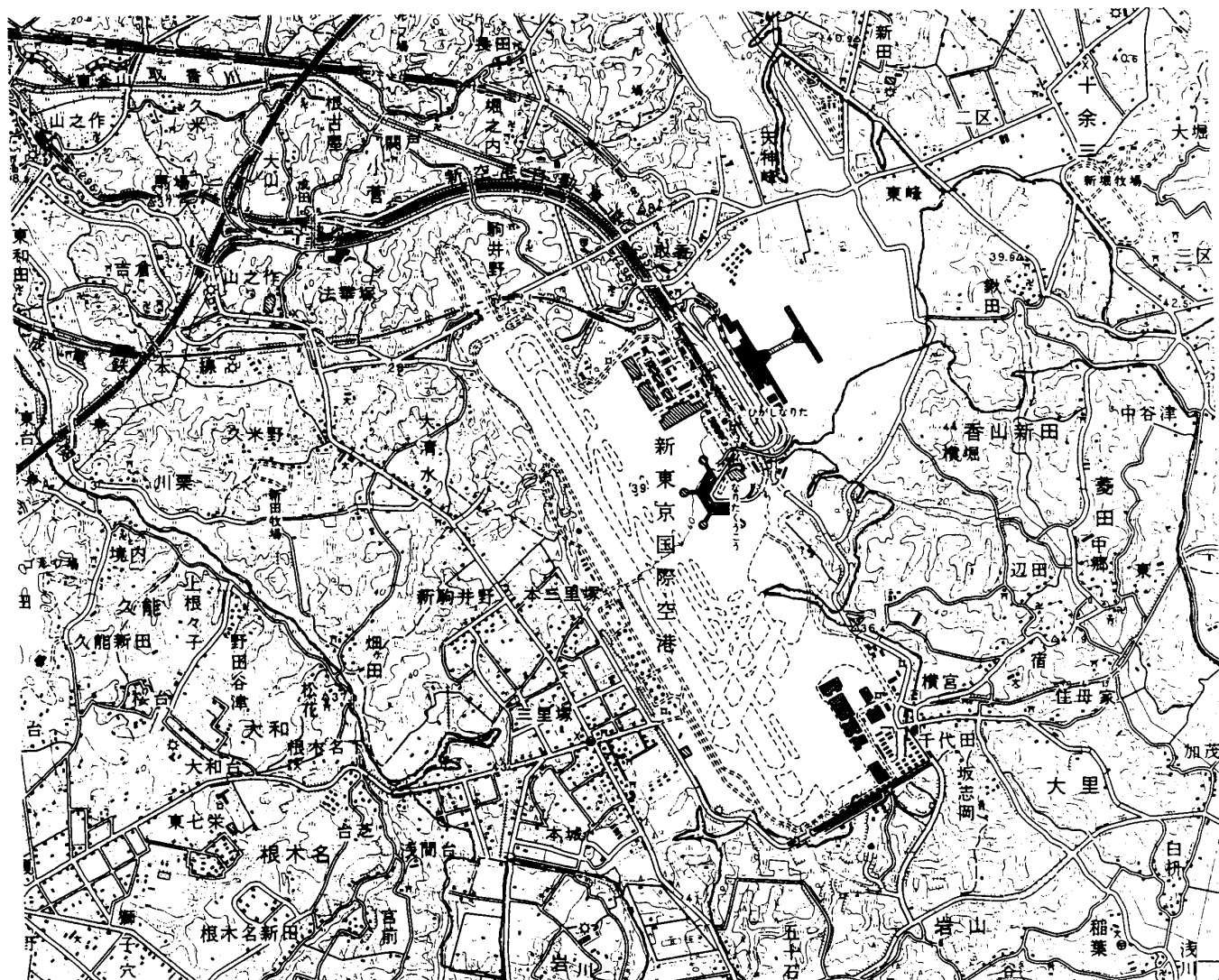
この土地は地図を見ると分かるように現在の東京国際空港のど真ん中であつた。それを地図上で示すと上図のようになる。<sup>20)</sup>ところがこの入植はスナリとはいかなかった。この時期入植、開墾を希望しているものに遠山村地元民、戦災者同盟、沖縄県人などがいた。『千葉新聞』1月29日号によれば、三里塚の御料牧場900町歩が開放運動の結果県に払い下げになり、その土地を巡って26日「三里塚で岡本第一経済部長、石井印旛地方事務所長、地元印旛郡遠山、富里、隣接の山武郡千代田、二川、香取郡昭栄の村長、農業会長が集り、貸下地に対する割当懇談協議会を開いた」。その結果「遠山村百町歩、富里村五十町歩、千代田、二川三十町歩、戦災者百町歩、その他百町歩」と

いう。それもすんなりとはいかなかった。1月31日号によれば、28日には戦災者同盟員100余名が乗り込んで開墾を始めたが、田中二郎（1942年以降）場長は「本省より戦災者同盟に対し県を通じて貸下げるとの通知だけで、まだ県から耕地の指定その他の指示がないのであるから同盟員の作業は不法占拠の形だ」として拒否し、戦災者同盟の開墾は頓挫したとある。それでも同盟は実力行使を続けていたようである。

伊達広（戦災者同盟支部長）に率いられた戦災者同盟はすでに沖縄県人の入植予定地に入植していた。これにたいして与世盛智郎は占領軍の権威を利用して伊達らを追い出した。戦前にハワイに渡って海外移民の経験を積んでいた与世盛は占領



## 戦後の三里塚牧場の開拓と沖縄・久米島



新東京国際空港現況図（1992現在）

軍の中の知人を通じてこの入植地は占領軍が承認しているという文書を手し、それをちらつかせながら伊達一派を追放することに成功したという。

こうした紛糾を打開するために戦災者同盟、沖縄県人、さらに地元民も入植希望者と千葉県当局の四者が協議した。『千葉新聞』5月18日号によると県以外の三者は県有林の開放をすることで「漸く円満に解決 三里塚牧場の土地分割問題」とあるが、それでも解決しなかった。8月5日号には「関係者が協議解決 三里塚開放地問題」という見出しで10項目の条件で妥結したという記事が掲載されている。<sup>21)</sup> それには「地元遠山村を始め

隣接の富里、山武、二川、千代田並びに戦災者同盟、沖縄協会の五代表が二日県開拓課に出県青柳開拓課長、宍倉成田署長立会の上」分割の適性配分を決めたとある。それには

- (一) 戦災者同盟の入植総面積を一七五町歩とす  
但し内二〇町歩に附ては東京都と具体的に調停するものとす
- (二) 富里村五〇町歩、遠山村七五町歩、二川村一五町歩（林地）とす（下略）
- (三) （略）
- (四) 沖縄協会は天浪第一の一七町九反歩の他新たに御料地解放地区林地及び雑地等を含みて

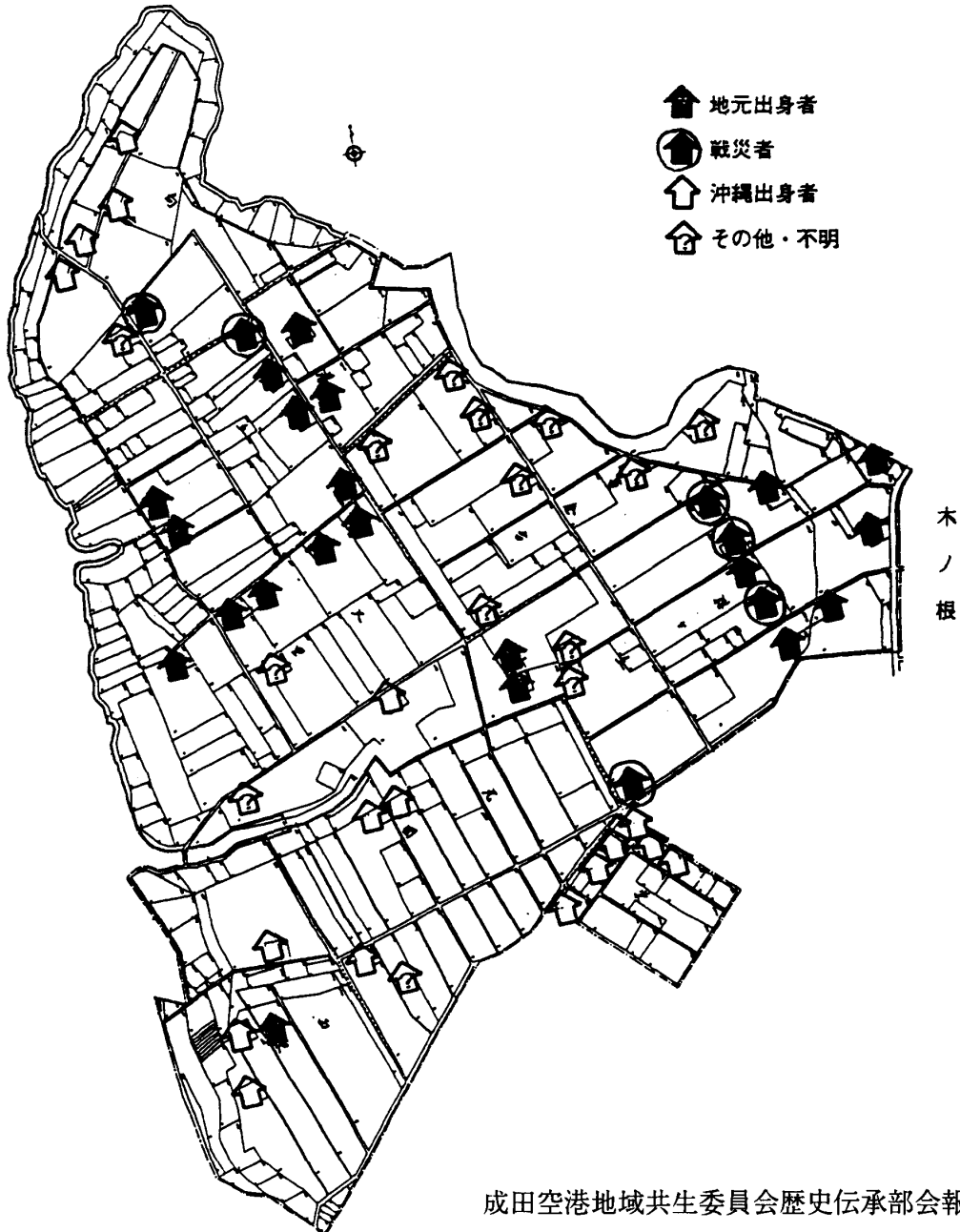
五〇町歩を追加するものとす、但し右林地の採草権等に附ては地元民と紛争を起こさざるやう関係代表者間において責任を以つて解決に当たるものとす

(五) 沖縄協会の割当林地に附てはその開墾に対し関係代表者において適当に協力するものとす

(六) 関係団体の地割については関係代表者において協定し大要の区画割図面を添付し八月五日までに県へ提出の上県の指示を受け決定するものとす

(七) 関係団体は入植者を厳選の上入植予定者名簿を八月七日までに県に提出し最終決定は県

## どこから来たの？ 天浪地区入植者概略図



成田空港地域共生委員会歴史伝承部会報告書より

## 戦後の三里塚牧場の開拓と沖縄・久米島

の裁定によるものとす  
(以下略)

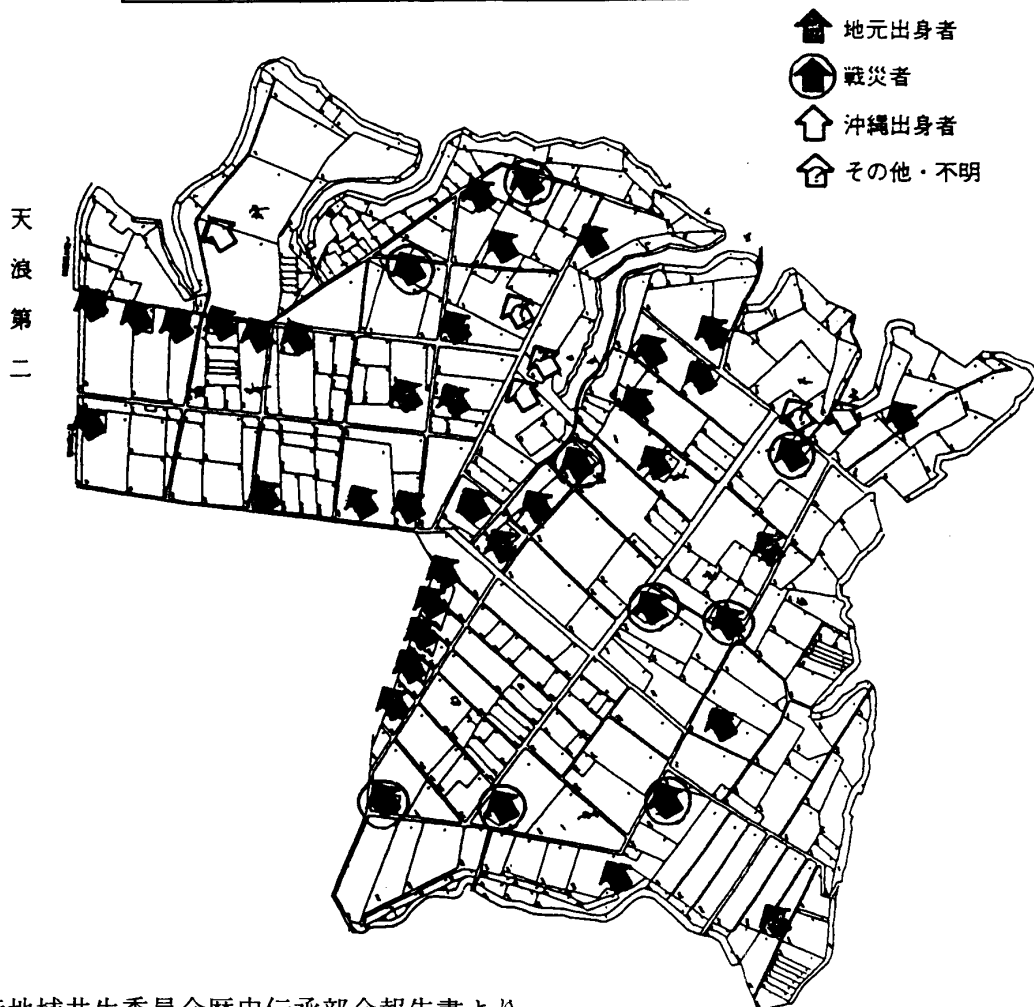
この結果沖縄県人の入植も可能になった。この時の入植者は50世帯、約100名だったという。その中には学校の先生が5、6人、大学卒業者も多く、入植者の知的レベルは高かった。永丘智太郎やその弟智行も入植した。<sup>22)</sup>その入植時の状況について先の山里以下7名の「歩み」は次のように述べている。<sup>23)</sup>

入植者は2百余坪の御料牧場の馬小屋を借り受け、壁の馬糞を荒い落とし、竹で編んで

床を作り、名を沖縄農場と改めて、新しい開拓生活の一步を踏み出した。

不馴れな手つきで、重い開墾鋤（トンビ）を振り上げ、牧草を根ごととはがし取り、掘り起こした土の下に埋め入れ、土塊を砕いて、一坪一坪畑を拓いていった。最初は短時日に食糧となり、その上収穫の多い、馬鈴薯や甘藷を作った。作物が食糧になる迄の期間は、持ち物を金に換えて米や甘藷を求めるという竹の子生活が続いた。赤貧と困苦に堪えられないで、脱落者も出たが、大半の者は頑張った。

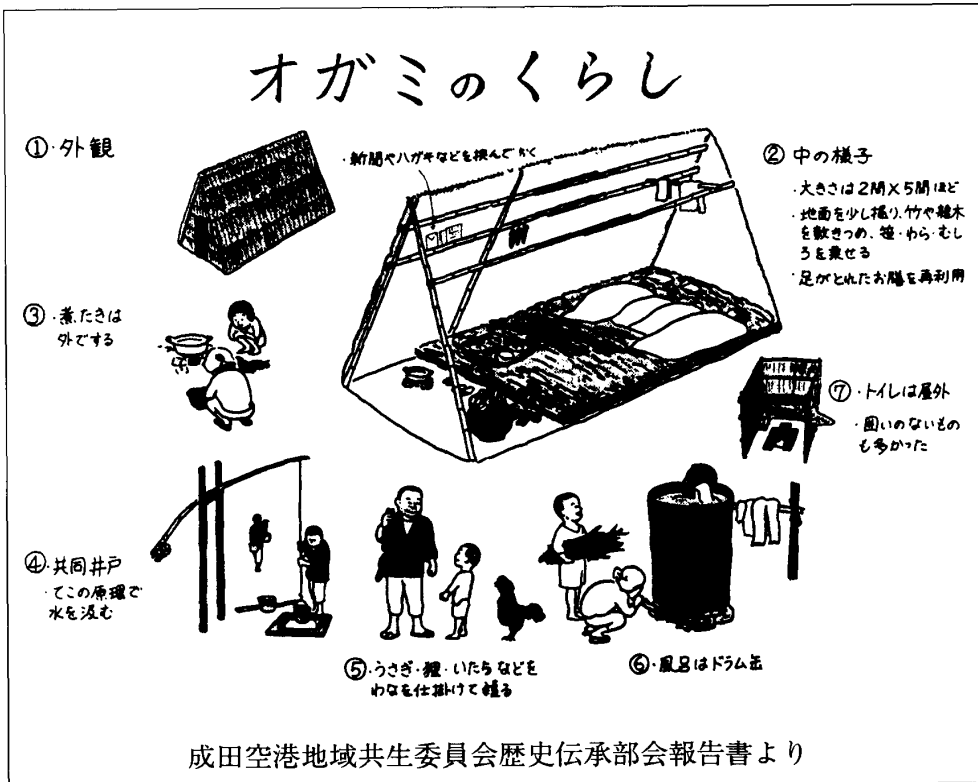
### どこから来たの？ 木の根地区入植者概略図



成田空港地域共生委員会歴史伝承部会報告書より

ここに記されているように当初は馬小屋に全員が共同生活をしていましたが、少し落ち着いた頃、各自がオガミという小屋を建てて住むようになった。それは2間に5間位の面積の場所に竹や雑木を敷きつめ、笹・わら・むしろを乗せて寝床とし、竹竿を斜めに合わせて三角形の屋根を造り、雨露をしのぐという簡単な構造で、いわばテントのようなものであった。もちろん井戸、便所、ドラム缶の風呂や炊事は外ですませた。作業は木の根を掘り、そこを耕して作物を栽培する、しかも農作業は初めてという人達が多かったので苦難の連続だった。上記の「歩み」は「大半の者は頑張った」というが、脱落者も相次いだようである。2000年2～3月に成田空港地域共生委員会が成田市と芝山町で開いた展示「空港前景 木の根・天浪の戦後開拓」によれば、調査時点が明確ではないが天浪と三里塚の入植者概略図によれば、天浪（第一～第三）では地元（周辺地区）出身21、東京など

の戦災者6、沖縄出身者17、不明14。木の根では地元出身者34（内農業経験者23）、東京などの戦災者8、沖縄出身者4、不明2あった。<sup>24)</sup>吉岡みな子氏の調査による「下総農業協同組合の人々」は全員33名（他に長原地区入植者が6名いる）の内、開拓当初からの人20名、途中入植の人13名、途中離農の人10名（途中入植者もいる）。<sup>25)</sup>こうした人数の違いは調査の時期による人数把握の困難さに由来しているようである。何しろ「木ノ根」という地名は「文字通り木の根っこが沢山あったから」つけられた名称であり、「天浪」というのは「天が波打つように上り下りが急であったことからつけられた名前だ」と言われているという。そういう土地を開墾して畑にするのは大変が苦勞を必要としたことは想定に難くない。したがって、入植時は約100名いたのであろうが、徐々に離農したり、転職したりしたのであろう。開墾の困難さを物語っている。



### オガミ

オガミとは、掘立小屋よりもっと簡単なつくりの小屋のことで、人が拝むときの手の形に似ていることからその名が付いたといわれています。戦後開拓地区には、当初、このオガミがあちこちにありました。生きていくだけで精一杯だった人々は、オガミを立てて、仮の住居としたのです。オガミは開拓者たちの苦勞の象徴といえるかもしれません。

戦後の三里塚牧場の開拓と沖縄・久米島

下総農業協同組合の人々

◎ —— 開拓当初からの人

◇ —— 途中から入植の人

◆ —— 途中で離農した人

● —— 組合解散時までいた人

@ —— 途中で亡くなった人

番号	名前	備考
1	永丘 智太郎	◎ @
2	宮城 博	◇ —— ●
3	山里 昌英	◎ —— ●
4	上江州 智昭	◎ — (一時転出) —— ●
5	上江州 智泰	◎ ◆
6	上江州 智宰	◎ —— ●
7	津嘉山 武	◎ —— ●
8	福地 才一郎	◇ —— ●
9	城間 安富	◎ —— ●
10	糸数 綱夫	◎ ◆
11	東門口 武八	◎ —— ●
12	永丘	◇ ◆
13	永丘 智行	◎ ◆
14	上原 勝勇	◇ ◆
15	東門口 俊栄	◎ —— ●
16	田里	◇ ◆
17	新垣	◎ ◆

番号	名前	備考
18	仲元 喜徳	◇ —— ●
19	茂田 光忠	◇ —— ●
20	米須 秀永	◇ —— ●
21	米須	◇ @
22	原 利男	◇ (32地へ移動) ●
23	中曽根 三郎	◎ ◆
24	東門口 俊一	◎ —— ●
25	金城	◎ ◆
26	嘉数 憲一	◎ —— ●
27	志伊良	◎ ◆
28	真栄田 義男	◎ —— ●
29	島 寛	◎ —— ●
30	新城 寛政	◎ —— ●
31	原 利男	◇ (場所移動) ●
32	福里 昌全	◇ —— ●
33	新島 盛喜	◇ —— ●

※ 長原地区に

照屋 勝雄      照屋 勝秀  
 上江州 智暉      上江州 智禎  
 吉浜 正三郎      具志 成功

この番号に対応する地図が添えられていたのだが、省略した。

1999年12月

吉岡みな子氏作成

Ⅲ 下総農業協同組合の推移

沖縄県人の三里塚入植、開拓によって開かれた下総農業協同組合の歴史を年表風にたどれば以下のようなものである（『千葉県戦後開拓史』による<sup>26)</sup>）。

- 昭和21年度      組合長 与世盛智郎  
 今年3月16日千葉県知事小野哲より御料牧場の天浪第一地区の入植許可され組合員50人入植、沖縄農場と命名する

- 昭和22年度      組合長 与世盛智郎  
 天浪第三地区 木ノ根地区 長原地区 大清水地区払い下げ、耕地拡大した
- 昭和23年度      組合長 与世盛智郎  
 沖縄食品工場（澱粉工場）設立。本三里塚山林払い下げ入植。第一次住宅資金借入れ、住宅建設始まる
- 昭和24年度      組合長 与世盛智郎  
 第二次住宅資金借入れ

## 環境情報研究 第 8 号

- 昭和25年度 組合長 与世盛智郎  
各地区の採草地払い下げ成る
  - 昭和26年度 組合長 照屋勝雄  
天浪、本三里塚間の通学道路開設
  - 昭和27年度 組合長 上江洲智宰  
澱粉工場の営業を休止する
  - 昭和28年度 組合長 真栄田義男  
澱粉工場を諏訪氏に貸す  
沖縄財団よりの借入れ金を整理返済する。三  
興組合の整理（債務の分割負担確定）
  - 昭和29年度 組合長 真栄田義男
  - 昭和30年度 代行委員長 上江洲智泰
  - 昭和31年度 代行委員長 上江洲智泰
  - 昭和32年度 組合長 上江洲智泰  
澱粉工場負債整理（個人別負担額、共有地整  
理）畜舎、納舎、サイロ、耕耘機等借り入れ  
並びに建設
  - 昭和33年度 組合長 原 利男  
同年 8月25日組合定款変更認可された
  - 昭和34年度 組合長 新城寛政  
澱粉工場負債整理完了（千代田農協へ登記完  
了） 土壤改良事業実施
  - 昭和35年度 組合長 新城寛政  
土壤改良事業実施  
政府資金、公庫資金等各種の借り入れ資金を  
一本に統合し整理す  
厚生部設立 事務主任 新島盛喜  
組合〔員〕各自の負債を整理し、之を資金と  
して組合員の福利厚生に充当
  - 昭和36年度 組合長 山里昌英  
土壤改良事業施行。チェスター種豚導入（保  
証協会より資金を借入れ、沖縄より導入）
  - 昭和37年度 組合長 原 利男  
天浪地区水道工事施行
  - 昭和38年度 組合長 照屋勝雄  
長原地区水道工事建設決議
  - 昭和39年度 組合長 新城寛政  
長原地区水道工事完成  
新興資金借入れ決議、並びに書類提出
  - 昭和40年度 組合長 城間安富
  - 昭和41年度 組合長 新城寛政  
新国際空港建設が閣議決定され木ノ根、天浪  
地区が用地に収用される  
大清水水道工事完成
  - 昭和42年度 組合長 山里昌英  
下総開拓農業協同組合解散に伴ない記念アル  
バムの作成に取り掛かる。<sup>27)</sup>
  - 昭和43年度 組合長 喜久川政範  
下総組合解散により債務精算委員会設定
  - 昭和44年度 組合長 照屋勝雄  
開拓記念アルバム完成。下総拓友会結成  
下総拓友会会長 上江洲智暉
  - 昭和45年度 （記述なし）
  - 昭和46年度 組合長 原 利男  
下総拓友会会長 新城寛政
  - 昭和47年 5月15日 沖縄県、日本に復帰
  - 昭和47年12月 3日 下総開拓農業協同組合解散  
式。今後は下総拓友会で親睦継続する
- この表からだけで単純に評価することはできな  
いことではあるが、大まかなところ、初期数年間  
は与世盛智郎のもとに結束して拡大路線をたどり、  
その後も基盤整備に勤め、ようやくにして一段落  
したと思われるころ、急遽空港問題が浮上して沖  
縄県人を戸惑わせることになった。その間およそ

## 戦後の三里塚牧場の開拓と沖縄・久米島

20年間であった。空港問題が発生したときの沖縄県人はどう反応したのであろうか。先に述べた山里昌英は「私の開拓史」のなかで「思えば25年前、終戦によって故郷沖縄を失い、第二の故郷とすべく、三里塚に入植……運命の皮肉は何処まで非情なのか、今再び安住の地を求めて移転しなければならないとは断腸の思い……」と記している<sup>28)</sup>。戦争中は唯一の戦場となって米軍に占領され、故郷に帰るに帰れず、やむなく辛酸をなめて三里塚に入植し、ようやく安定した生活が可能になったと思った時またもや立ち退きを迫られた運命は、悔やんでも悔やみ切れるものではなかったであろう。

それにしても何故三里塚が候補地として決定したのだろうか。当初空港の予定地には富里村も候補地であったが、結局三里塚に決まった。その間の理由を示す明確な理由は知らないが、恐らくは富里村の方が明治以来の古村が形成されていたことにあるのであろう。三里塚は戦後の開拓で村落としての歴史も伝統も薄い、しかも初めて農業に従事するものもいて、古くからの村落の状態と比べようもなかった。それにたいして富里村は農家が多く、長年の農業の伝統と歴史をもっていた。外部からみれば歴史の浅い三里塚の方が立ち退きを迫りやすいと思われても致し方ないところがある。そうした両者の違いが候補地選定に影響したのではないだろうか。

## IV 開拓者と久米島

すでに三里塚入植の指導者の与世盛智郎や山里昌英、上江洲智泰、上江洲智昭らが久米島出身者であることについては述べてきたが、両者にはどういう関係があるのだろうか。もっと視野を広げ

れば沖縄県と移民との関係と言ってもよいであろう。この問題についての先人の研究を紹介すると、先ず石川友紀「沖縄と移民 沖縄県移民に関する文献紹介」によれば、日本における道府県別出移民数（1899～1937：39年間）の数字はトップが広島県の96,181人、2位が沖縄県の67,650人、以下熊本県67,323人、福岡県50,752人、山口県45,050人と続く。ところが出移民率を見ると1940年の記録は沖縄県が9.97%で断然トップ、以下熊本県の4.78%、広島県の3.88%、山口県の3.23%と続いている<sup>29)</sup>。両者は同一年ないしは同年代ではないので必ずしも正確な比較とはいえないが、大勢を示しているとは見ることができる。沖縄県は出移民者数、出移民者率ともに非情に高い県なのである。その理由として考えられることは何であろうか。この点に付いて石川氏は慎重に結論を避け、「一ついえることは沖縄権移民は日本移民の集団のなかでもきわだって個性の強い集団としてとらえられるのではないだろうか」としているに止まる。

しかし別の論文「日本移民研究のための基礎試論」の中では「移民の動機・要因」について複合説をとるという前提の下に「①経済的要因はある特殊な場合を除き、すべての根本的要因となりうる。②出移民に関する外的要因（環境条件等）が備われば、出移民の基礎固めができたと考える。③しかし、実際に移民するまでには何らかの契機が必要である。これは、移民個人に関する直接的・具体的影響を及ぼす内的なものが基礎となる」と述べている。これも抽象的な整理であって、沖縄県人が海外や日本本土に移民することの具体性を欠いている<sup>30)</sup>。

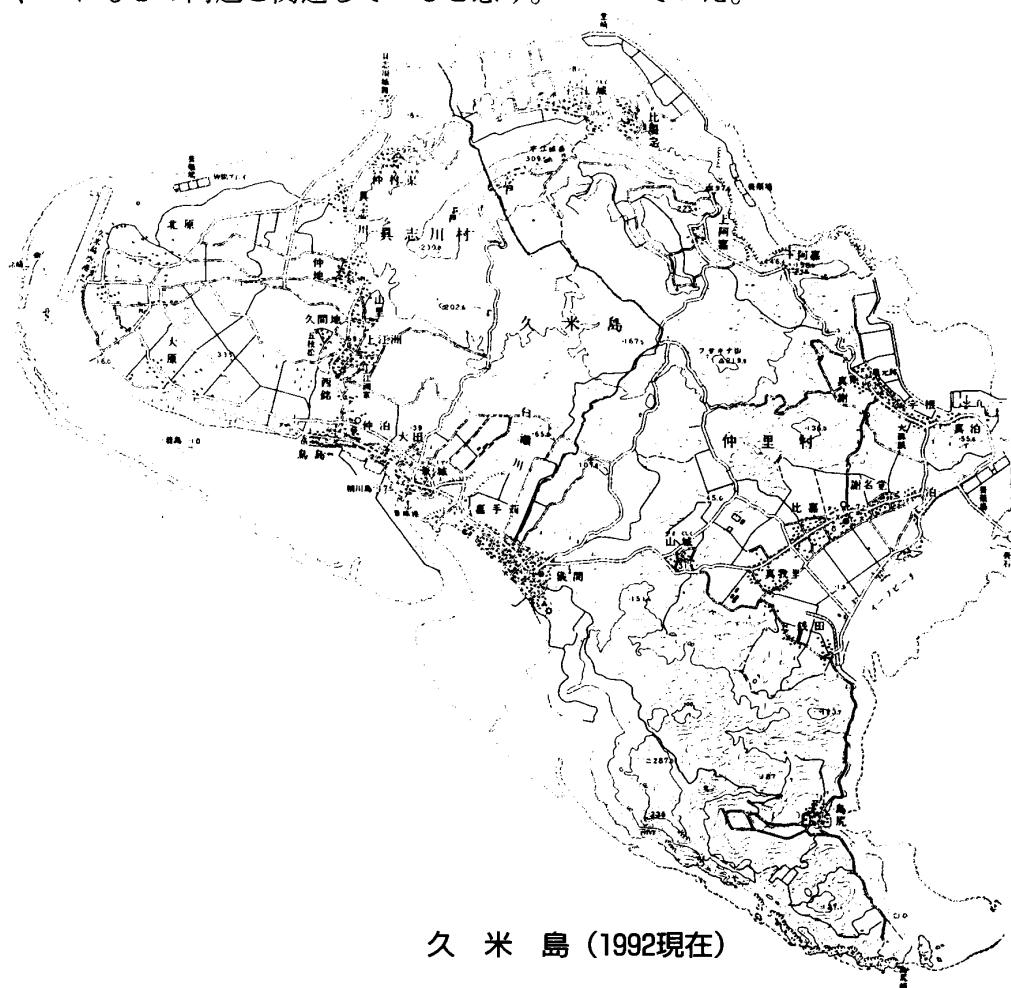
ところが1998年12月21日に直接面談した際、もっと具体的な理由を伺うことができた。その時

のメモによれば沖縄県人の海外移民の動機として挙げられたことは以下の4点であった。<sup>31)</sup>

- 1、沖縄県設置以後、沖縄は本土の支配を受け、差別され続けたため、本土に移住した場合は差別が継続し、一層ひどくなることが想定された。したがって本土とは無関係な海外に移住した。
- 2、海外進出に抵抗が少なかったのは、沖縄が小さな島々から成る島国で耕地が少なく島内で生活していくことに不安があり、一方四方を海に囲まれていて、船で海外に出ることに抵抗感が少なかった。
- 3、経済的に困窮していたから次男、三男が稼げに出ると思われがちであるが、沖縄では長男が積極的に海外に出たという傾向があるが、これも2の問題と関連していると思う。

4、しかし長男が出ていくことも経済的発展、成長を目指していたことは否定できない。したがって長男が成功すると一族を招き、その親戚知人を招いた。そのようにして海外移民が増加していった。

このことは沖縄県人の海外移民一般のことであるが、それでは久米島の人達はどうかだろうか。久米島は沖縄本島の那覇市のほぼ西方90km沖にある面積58.5km<sup>2</sup>の島で、山があったので木があり、水があり、その恩恵で昔から米作が可能であったという。島の東側過半は仲里村、西側は具志川村である。その内、三里塚の関係者は後者の出身者であった。具志川村は仲村渠、具志川、仲地、山里、上江洲、西銘、久間地、北原、大原、鳥島、仲泊、大田、兼城、嘉手刈の14字から成っていた。



久米島 (1992現在)



## 戦後の三里塚牧場の開拓と沖縄・久米島

この具志川村の移民に詳しい西川大二郎「久米島の海外出移民の社会経済的特性」によれば、本土の移民が「貧農の次・三男が圧倒的に多い」が、沖縄や久米島の出移民は「圧倒的に嫡子が多い」とその違いを指摘している。<sup>32)</sup>それは石川氏の分析と共通している。西川「沖縄県久米島具志川村における海外移出民—特に中南米移民—の特性について」は仲村渠、具志川、仲地、山里の4部落を調査したのであるが、それによれば、具志川村の方が仲里村より移出民が多いという。<sup>33)</sup>ここでは三里塚に関係ある部分のみを抽出したい。村で一番古い小学校は1882（明治15）年創立の大岳小学校であり、それ以来の歴史をまとめた『具志川尋常高等小学校50周年記念誌』（1934年）が紹介されている。そこ中の「具志川尋常高等小学校卒業生の活動状況（昭和8年）」という表によればその内の251名が移出民で、外国・外地が115名、沖縄本島41名、八重山3名、本土14（内東京8）名、在島78名である。この表を分析して西川氏は次のようにいう。<sup>34)</sup>

記念誌内統計で明治15年の創立以来昭和7年までの初等・尋常科卒業生を概算すると、その数は3,190名であり、昭和8年当時、まだ青年に達していないと考えられる大正14年以降の卒業生を差引いても、約2,000名の卒業生がいたはずである。（表の）251名は、死亡者、状況不明者を考慮に入れても、卒業生の1～2割に過ぎない。しかし、ここに記載されている卒業生は、卒業後、島内（村内）において純粋に家事（自家農業を含む）に従事している者を除いたものであり、島の内外で社会的に活動している者という評価が加えられている。

この説明の数字の部分が理解しにくいところがあるが、いずれにしろ251名の内、約31%は島内に止まり、他は移出民として島を離れていったと理解できるであろう。

出身字別では一番多いのが西銘、次いで仲地、仲村渠、山里、鳥島、大田、具志川、兼城とつづくという。ところでその中の西銘部落のトップに与世盛智郎が登場する。渡航先はホノルル、「大正4年、ワイパフ学園」とある。ワイパフ学園の実態は不明であるが、与世盛が1915年にハワイに渡った人であることは明らかである。さらに前記『50周年史』には次ぎのような記述もあるという。<sup>35)</sup>

殊に近々24、5年以來、著しく郷村の膨脹發展せし形勢の澆刺として生氣を示し、今や孤島民といえども……意氣衝天の勢いを以つて村民の海外県外に勇飛を試みる者年と共に數を増し、現在教育家として帝都の中央に活躍せる当原昌松君、山里昌英夫妻、及び喜久永仲君、内間仁徳君、盛吉智順君、鹿児島中学に仲村渠昌信君、樺太に安村仁祐君、台湾に内間広和君、伯国に上江洲智昇君、……宗教家には米領ハワイの天地を教化して偉名ある与世盛智郎師及山里慈海師あり、実業家には南米伯国に上江洲智維君その他幾多の先輩有志あり、秘露亦如斯、北米には仲村渠昌広君の活動に至る、皆各自天与の力量を發揮し、往々外人をさえ驚倒せしめ、……

とある（下線は神田）。この中の与世盛と山里が三里塚に入植したリーダーと中心的人物の一人であった。それ以外の人物については知るところはないが、久米島という小さな島から如何に多くの有為の人材が出て、海外や本土に移民したかが分かる。

すでに触れたことであるが、与世盛と一緒に三里塚に入植した上江洲智昭、また後に与世盛の娘婿になった上江洲智泰も山里昌英も久米島出身であった。さらに島寛、新城寛政は姻戚にあたり、上江洲智宰も久米島出身者であった。中でも智泰は西銘の出身で、家は旧具志川城主の末裔で代々地頭代を勤めていた名家であり、同家に伝わる「美濟姓家譜」は日本語で記されているが清の康熙帝の名前も登場する家譜で、江戸時代における清と日本の中間に立地していた沖縄・久米島の立場を物語るものである（法政大学『久米島の総合的研究』に全文が活字化されている）。その生家は1726年に建てられた貴重な建物で1972年に国の重要文化財に指定された歴史的遺産である。<sup>36)</sup> その家の長男に生まれた智泰は出移民者ではなく、軍隊に徴兵され、戦後帰れなくなったので与世盛とともに三里塚に入植したのであった。その晩年の1998年12月22、直接面談する機会を得た。話の内容は、今自伝を執筆中で、その中に三里塚の入植・開墾のことも書いているとのことであった。その自伝『久米島と私』は1999年7月に刊行され、その後間もない9月に死去されたが、面談の際の内容は自伝の記述と基本的に同じであった。ただ(注26)で触れたように、下総農業協同組合組合長在任の時期が『戦後千葉県開拓史』とは違っている。この問題の解明は未済である。

いずれにしろ、三里塚に入植した沖縄県人は与世盛智郎をリーダーとした久米島出身者で知的レベルも高く、かつ海外や日本本土への出移民した人達をによってなされたことは否定し得ない事実であった。その人達は成田空港建設問題で周辺地域や他地方に離散したが、今年2～3月の「成田空港地域共生委員会歴史伝承部会」主催の展示「空

港前景 木の根・天浪の戦後開拓」を契機に、改めて戦後の苦難の開拓の歴史が回想されつつあるようである。

## 注

- 1) 『千葉県戦後開拓史』 p.21 (千葉県 1974)。  
これに対し『戦後開拓史』(戦後開拓史編纂委員会編 1967)の p.98の「道府県別未墾地取得目標面積と実績」表によれば千葉県の軍用地は4,843町歩で、北海道、青森、静岡、宮崎、栃木、福島、岩手について第8位、以下長野、群馬、新潟と続く。もし6,507町歩ならば静岡の6,642町歩に匹敵するものであるが、両者の違いの理由は不明である。
- 2) 『角川 日本地名大辞典 千葉県』(1991)
- 3) 『戦後開拓史』 p.34、注1) p.1
- 4) 君津市史編纂室所蔵 旧八重原村役場文書(未公開)
- 5) 『千葉県戦後開拓史』 p.21
- 6) 同前 p.231
- 7) 同前 p.39
- 8) 同前 p.225～226
- 9) 『下総御料牧場史』第1部第3、4、5章(宮内庁 1974)、『成田市史 近現代編』p.77～85、第1章第2節第4項「三里塚牧場」(成田市1986)
- 10) 『下総御料牧場史』 p.197、p.336
- 11) 同前 p.354
- 12) 同前 p.451～452
- 13) 同前 p.39
- 14) 与世盛智郎の経歴については長女の婿上江仁憲が書いている。『沖縄県姓氏家系大辞典』

## 戦後の三里塚牧場の開拓と沖縄・久米島

(角川書店 1992)にも与世盛智郎の項目はあるが、記述には違いがある。

大岳小学校は1882年5月に建てられた久米島最初の小学校で『百年誌』は1986年に刊行された。中には与世盛が「明治38年」の、山里昌英が「大正6年」の卒業生として、島寛(旧名島袋寛次郎)が「懐古」と題し1930～33年の教諭時代の思い出を語っている。与世盛は思い出の中で「私も早九十歳になるが…」と記しているので執筆は1982年と思われる。死没年は何時かは分からない。

『百年誌』の末尾には小学校出身者で各界の著名人が列挙されている。その中で三里塚の関係者を挙げると、「企業関係(部長以上)」に上江洲智泰が久米島製糖社長・日本分蜜糖工業会副会長、上江洲智昭が成田国際空港サービス社長として、「教育関係」には山里昌英が千葉県遠山中学校教頭として、「宗教関係」では与世盛智郎が開教使として紹介されている。

なお具志川小学校が1946年に大岳小学校と改称したと『百年誌』に記されている。

- 15) 『千葉県戦後開拓史』 p.132～135
- 16) 上江洲智泰『久米島と私』(若夏社 1999.7) p.116に、『沖縄大百科辞典』を引用して説明している。しかし、『沖縄大百科辞典』の石原昌家執筆の「沖縄県人会」には「松本」以下の人名は出てこない。ただし連盟結成の契機や目的については次のように書かれている。「第二次大戦が終息し、本土社会の沖縄出身者は、出稼ぎ定住者に加えて沖縄からの疎開者、男女徴用工、〈外地〉からの引揚者、復員軍人らが混乱と困窮の異郷の地で路頭に

迷っており、その救援活動をおこなうために内務・厚生省助成で財団法人沖縄協会が結成された。しかし、その機関では全国に散在する沖縄人同胞を救出することは困難であると思われ、全国的統一組織として〈連盟〉の結成が企図された。……綱領…には郷里における経済・文化の復興促進、戦災の完全補償の実現をはかるとともに民主主義平和日本への貢献、本土在同胞の生活権確保などがうたわれている」

- 17) 『千葉県戦後開拓史』 p.133
- 18) 1997年11月29日の御料牧場記念館でのインタビューでの上江洲智昭氏の証言、
- 19) 『千葉県戦後開拓史』 p.133
- 20) この地図での天浪第一・第二・第三等の区画と成田空港の滑走路の線については山里昌英の次女吉岡みな子氏の作成によるものである。それは『千葉県戦後開拓史』付録地図の不十分さを訂正するものであった。
- 21) 以上の『千葉新聞』の記事は成田空港地域共生委員会主催の「空港前景 木の根・天浪の戦後開拓」展示に掲示されていたが、元来活字が潰れていて読みにくいものであった。それを同委員会の歴史伝承部会研究員の福井千緒氏の好意で読みやすく再生していただいたものから採録した。
- 22) 上江洲智泰 前掲書 p.132
- 23) 15) に同じ
- 24) オガミのイラストおよび入植者の人数は 21)の展示の必要部分の福井氏の提供による。
- 25) 吉岡みな子氏 1999年12月提供
- 26) 『千葉県戦後開拓史』 P.178～179。それによれば1946～1950年までは与世盛智郎が組合長

となっており、上江洲智泰の組合長は「代行」を入れて1955～57年とあるが、『久米島と私』によれば1950年4月1日に「下総開拓農業協同組合初代組合長」となり、1959年3月31日に「辞任」と記述されている。両者の違いの理由は分からない。

吉岡氏に問い合わせ、上江洲智昭氏の記憶も呼び覚ましていただいたが明確には分からなかった。ただ智昭氏の語るところでは「与世盛智郎の後を継いだので昭和25年頃からと思われるが、智泰が記している34年まで9年という長期間ということはないだろう」ということだった。幼い頃の吉岡さんの記憶も含めての評価であるが、智泰は若くして組合の中心的役割を果たしていたから「組合長」という自意識があったかも知れない。しかし1950年の時点では智泰は満28歳のため、組合長は年配の人が勤め、実質的には智泰が中心的に活躍したという事ではないか、その意味では『千葉県戦後開拓史』の記述が正しいだろうということであった。

この間上江洲智泰は成田市農業委員・同建設審議会委員・同新農村建設委員長等を歴任したが、故郷の父の誘いで帰郷、1962年2月久米島製糖株式会社企画室長として入社、後社長、会長に就任した。その後琉球政府糖業審議会委員等を勤め、また久米島紬株式会社等を設立した。

- 27) このアルバムについては1997年11月29日に三里塚御料牧場記念館を訪ねたとき、新島新吾氏から見せていただいた。それは1966年3月、入植20周年記念事業として新島氏の岳父新島盛喜氏が発案し、新島氏や照屋勝徳・山里昌

春氏らが撮影したという。撮影方針として、1) 全家族をいれた家族写真、2) 入植以来の生活の根拠となった住宅を撮影する、3) 農業経営の特徴をいれる、4) 三里塚付近の景色や組合行事のスナップをいれる、等を採用した。それは開拓地の生活の実態が良く分かる内容であった。ところがこの年の7月4日、佐藤栄作内閣は新東京国際空港建設予定地を成田市三里塚に決定したため、このアルバムが下総農業協同組合の思い出のアルバムとなった。

- 28) 山里昌英「私の開拓史」(『千葉県戦後開拓史』 p.98～100)
- 29) 石川友紀「沖縄と移民 沖縄県移民に関する文献紹介」 p.142～143 (『新沖縄文学』 45 1980.6)
- 30) 石川友紀「日本移民研究のための基礎試論」 p.42 (『講座“移民学” 確立への方向性を探る』 p.36～55 PMC出版 1986.6)
- 31) 文責は神田・高澤
- 32) 西川大二郎「久米島の海外出移民の社会経済的特性」(法政大学百周年記念久米島調査委員会編『沖縄久米島の総合的研究』 p.58 1984年)。
- 33) 『沖縄県史 7 移民編』(同前 p.58より重引)
- 34) 西川大二郎「沖縄県久米島具志川村における海外出移民—特に中南米移民—の特性について」(法政大学教養部『紀要』 no.63 p.66 1987.1)
- 35) 同前 p.85
- 36) 『沖縄姓氏家系大辞典』第一部「歴史・人物編」の第二章「市町村の歴史と人物」の「具志川村」の項による。なお大田昌秀前沖縄県知事も具志川村山里の出身である。

追記 この論文の作成の最終段階ではすでに述べたように成田空港地域共生委員会歴史伝承部会の展示に非常に啓発され、同部会の研究員福井千緒さんから資料の提供を受けた。また故山里昌英・タケの次女吉岡みな子さんから沖縄出身の入植地の地図や入植者の名簿を提供していただいた。2000年3月には44名にのぼる新しい名簿もいただいた。しかしこの論文は沖縄のとくに久米島との関係を重視する趣旨から十分には利用できなかった。この点をお断りしつつ、両者には厚く謝意を表する次第である。

## ABSTRACT

### Reclamation of Sanrizuka after the War by Settlers from Kumejima, Okinawa

Fuhito KANDA, Yoshiko TAKAZAWA

After World War II, settlement and cultivation throughout Chiba Prefecture increased rapidly.

Agricultural Cooperative Societies for land reclamation were organized in quick succession and soon numbered 113.

This paper investigates the changes affecting agricultural society organized by Okinawans, who settled in Sanrizuka, Chiba Prefecture after World War II. Traditionally Okinawans emigrated both abroad and to mainland Japan in large number. People in Kumejima were no exception. One was Chiro YOSEMORI who was a pharmacist in Hawaii prior to the war. He was in mainland Japan at the last stage of the war and began, and continued, the movement for the release of *goryo bokujyo*, or pasture land belonging to the Imperial Family, to general citizens, including Okinawans.

Yosemori gathered together Okinawans, who could not return to Okinawa, and helped them settle in the former *goryo bokujyo* in Sanrizuka. Most of these people were from the island of Kumejima and they became the central activists of this settlement and movement for land reclamation. This paper looks at the hardships they experienced up until and during the resettlement of this area.

After Yosemori, the management of the society was left to Chitai UEZU, Yosemori's son-in-law, and other people from Kumejima. When, at last, the settlers had secured their livelihood and attained a fair level of stability in their daily lives, the government decided to build an airport on their land they were forced to move.

This paper was mainly written by KANDA after formulating and working over the whole plot with TAKAZAWA, who cooperated in making the close inspection on the interviews with Professor Tomonori ISHIKAWA at Ryukyu University, Mr. Chitai UEZU, in Mainland Okinawa, and Mr. Tadashi KIKUNAGA and Mr. Chiryu UEZU in Kumejima.